Somatalization（身体化）について

波平恵美子*

I　「身体化」とは何か

Somatalization あるいは Somatization とは，精神的なあるいは心理的な葛藤が，身体の特定の疾患として現れること，あるいは，自らの精神的・心理的葛藤を身体の具体的な不調や苦痛として体験するという現象のことで，一般に「身体化」といわれる．

臨床的には，たとえば，胃や十二指腸の潰瘍が見出されてそれに対して治療を行った場合，ごく短期間には症状が消えたり軽くなったとしても，すぐにまた同じ症状が現れるということが繰り返される．そのような場合，患者が抱えている精神的な葛藤が解きほぐされるような対策をとったり，状況が変化して患者の精神的な葛藤が解決すると，繰り返し現れていた症状がすっかり消失するようなことがある．このような場合は，患者の胃や十二指腸の潰瘍は精神的な葛藤が「身体化」していたと考えるのである．Psychosomatic disease という分類は，以上のような「身体化」という現象が起こりうるという考え方に基づいて出されてきた．

中国や台湾の漢民族における病気観や治療行動の研究を行ってきたアーサー・クラインマン Kleinman, A. などによって，漢民族は精神的な葛藤や障害

*　九州芸術工科大学教授・文化人類学

を身体的な不調として訴える傾向が強いことが指摘されている．つまり，漢民族は「身体化」の傾向が強いというわけである．チェン・イー・ワン Jen-Yi Wang は，「中国文化のコンテクストにおける心身症」[1]という論文のなかでいくつもの事例を報告し，中国人において，どのようなかたちで「身体化」が現れるかについて示している．そのなかから次の二例を述べる．

1．事 例 ①

18歳の男性．身体症状は，目まい，腰痛，腹部の不快感など様々で，いずれも本人がそれを訴えている．外見は痩せて青白い顔つきをしている．付添いの母親によれば，生まれつき身体が弱く，幼児の頃は風邪をよくひき，病気で苦しむことが多かったという．小学校を終えてすぐ工場で働いたが，背中の痛み，目まい，胸痛を訴え，西洋医学と漢方の両方の治療を受けていた．18歳になり，兵役義務に就くようになったが，本人も母親も，それには耐えられないと感じて身体的疾患が見つかることを望んで病院や診察所をまわった．しかし，あらゆる検査の結果，身体は健康であることがわかった．そこで，この男性は医師の助言によって精神医学的診断を求めてきたのである．

チェン・イー・ワンは，この事例は「過度のもしくは望ましくない義務からの逃避の口実としての心身症」として分類している．この事例では，身体器質的な疾患は見出せなかったのであるから，精神的葛藤の身体化は，本人の訴えのなかに見出されるだけだといえる．著者は，この男性のこのような身体的不調の訴えは，幼い頃から何か自分にとって好ましくない義務から逃れる口実として使われるようになった，と述べているが，本人には口実として用いるという認識はないのかもしれない．この男性において，不安は，現実に身体的な痛みや不快として体験されていると考えられる．

2．事 例 ②

家族全員が背中に痛みを感じ，何かが背中に貼り付いたように感じ，それは重いおもりか「荷物」のような感じであるとシャーマンに訴えた．その1か月

前，嫁がオートバイ事故で死亡したが，それは自殺ではなかったかとその家族は恐れていた．というのは，彼女はその家の商売の金を盗んで実家に送金したのがみつかり，家族の者と再三喧嘩をしていた．彼女は自分の夫（その家の息子）に，早く家を出るよう促し，もしその邪魔をするなら自分は自殺し，死霊となってその家族に付きまとい復讐してやると脅していたからである．その家族は，したがって，彼女の死後，死霊が襲うのではないかと恐れ，また邪術の力をもつと信じられているその女の父親が，娘の死の報復のために自分たち家族に邪術をしかけるのではないかと恐れてもいた．相談を受けたシャーマンは，死霊祓いの儀礼を行った．その結果，全員の背中の痛みは軽減した．

著者は，この事例を「深層の，受容不能な精神的葛藤の置き換えとしての心身症（強い罪悪感に関連している）」として分類している．この家族においては，嫁との間に生じていた，彼女の生前における両者の葛藤は，彼女がもはや死んでしまったために解くことはできず，彼女との人間関係の修復を果たすことはできない．この家族に残された手段はもはやないわけで，それは二重の葛藤をこの家族が経験していることを意味する．それが，「死霊が祟る時にはその相手の背中に貼り付く」という民間信仰と結び付いて，「背中の痛み」として感じられていると考えられる．あるいは，そのような解消不可能な葛藤は，台湾の中国人にとってはそのようにしか体験できないのであり，シャーマンは，このような場合に人々が体験する内容を熟知しているので，死霊祓いの儀礼が唯一可能でしかも効果的な方法として採用したのだといえる．

この事例においては，全員の背中の痛みに何か器質的疾患が見出されたかどうかは明らかではない．精神的葛藤の「身体化」は，この事例ではクライアントの訴えのなかにだけ現れたのかもしれない．

幼い子供が，強い不安や怒りや拒否の感情をもつとき，「おなかが痛い」という身体的な不調，苦痛で訴えることは日本でもよく観察される．著しい場合には脂汗を浮かべ顔面蒼白になって痛みを訴える．それを，幼児は言語表現の能力が発達してないので，代替手段として「身体化」しているのか．言語表現を十分に獲得すれば，そのような「身体化」は起こらないのか．あるいは，幼児

においては精神的葛藤と身体的苦痛の体験とは分化できないものなのか.

アーサー・クラインマンやイー・ツァン・リー Yih-Yuan Li などは，中国人においては，重い精神病の場合も軽微な情緒障害の場合も，それが「心」の病いであることを拒否する傾向が著しく，身体的不調として訴える態度が著しいのは，中国文化においては精神病（心の病い，心の弱さ）に対して，社会的文化的に厳しいスティグマを付与するからだと指摘する[2]. しかし，それは中国人における「身体化」の原因あるいは動機なのだろうか. 精神的葛藤であれ，身体的苦痛や不快感であれ，それらはいずれにしろ本人にとっては苦痛の体験である. 一方（精神的葛藤）が他方（身体的苦痛）に置き換えられる，つまり「身体化」されるという考え方のなかに，すでに特定の限定された疾病観念が反映されていると考えられなくもない. 先にあげた，幼児の「おなかが痛い」という訴えは，自分の精神的葛藤を言語表現する能力がないから身体的苦痛に「身体化」されたものではなく，幼児は，自分の周囲の様々な環境との不調和の状況をそのように体験しているのだということもできる.

II 「身体化」をめぐる問題

文化人類学あるいは民族学の調査研究によって，非西欧社会の人々が精神的疾患と身体的疾患の区別をしないこと――それは病因について人々がもっている説明の内容や治療方法において区別しないこと，また治療の方法それ自体において示されるのだが――が明らかになっている. たとえば，身体のどこかの痛みを訴える病人に，伝統的治療者が「身体の内部に病気をひき起こしているこれこれの原因が侵入したためだ」と説明しながらも，その治療方法は，注意深く集められた「薬」の材料を，入念な手順で煮立てて「薬」を調合するが，それは服用されるのではなく，病人とその家族や親族の身体に振り掛けられる. このような治療方法はしばしば劇的な効果をもち，病人の苦痛が取り除かれることが観察されている.

病気の体験の内容と治療を受けた体験，そしてそれによって病気から回復し

たり苦痛が軽減したという治癒の体験は相互に関連し合い，フィードバックの関係を成立する．病気は，それが癒されたように，病人によって体験されるともいえる．新しい医療体系が導入され，しかもそれ以外の医療体系が制度的に制限されて接近しにくくなった場合，新しい医療体系が人々の疾病観念を少しずつ，緩やかであっても変化させ，それに従って人は自分の病気の体験を変化させているということも起こるだろう．

昭和30年代末から40年代初め（1964,5年頃から1967,8年まで）において，四国南西部の農山村の人々は，精神病と身体の病気と区別していなかった．「サワリ」と「サワリではない病気」とに分けていて，「サワリ」とは死霊や生霊，山の神や金神などが原因となって起こす病気や異常行動のことであった．「サワリ」は，正確には病気と同じ内容を指すのではなく，日常生活において，本人およびその周囲の人々が著しく支障を感じさせられる状態をいった．現代医療による治療（精神病も含む）を受けながら，同時にサワリであるかないか，サワリならばその原因を探し，それを取り除く役割を村落在住の祈禱師がもっていた．この村落はきわめて緊張の高い社会的に特殊な状況にあった．全戸の聞き取り調査によって明らかになったのは，高い割合で，頭痛，不眠，イライラする状態，「婦人病」を経験していた．それら慢性的な不調の状態は精神的な葛藤の「身体化」ととらえることもできるが（実際，遠方の総合病院で受診すると何らかの病名が与えられ，投薬されていた），この村落の人々は治療を受けてもなかなか治らないと祈禱師を訪れて「サワリ」ではないかどうか占ってもらう．「サワリ」ならば，金神の祟りであったり，先祖の霊あるいはどこの誰ともわからない死者の霊が祟ったり憑いたりしているのではないかなどをより詳しく占ってもらう．調査者から見ると，祈禱師から「サワリ」だと判断された人は，病気になる前から村落内の人々とあるいは家族の内部で，何かの人間関係をめぐる葛藤があった事例が多いので，そのような精神的葛藤や心理的緊張と，その人が訴える身体的な苦痛との間には何らかの関係があるのではないかという分析をしたくなる．しかし，これまで多くの文化人類学あるいは医療人類学の研究者が報告しているように，この村落の人々もまた自分たちの精神的葛藤

を語ることがほとんどできないようである．祈禱師を通して，より正確には祈禱師を通してのみ，病気が何らかの人間関係によって生じた精神的な葛藤が原因であることが暗示されるが，生霊を除いては，直接的な表現はされない．なお，生霊が憑いていると祈禱師が判断すると，遠方の村落から霊媒が招かれる．「口惜しい」，「嫉しい」，「羨しい」などの，ある人の他の人への直接的な感情表現は霊媒を通してのみ表現される．換言すれば，病気が，自分と具体的な誰か（複数のこともある）との葛藤と何らかの関係があることは，幾重にも隠され屈折したかたちでしか表出されないのである．むしろ，人々はそれをいかにして覆い隠すかに苦心しているかに見える．ただし，人々は自分たちの祟り・憑きの信仰体系が，「現実社会の人間が生きていくうえで体験する精神的葛藤を隠すとともに解消する文化的装置」であると認識してはいないといって，まず間違いないだろう．

ある中年の男性の腕が突然腫れあがり，紫色になって足のような太さになった．それ以前の自分の行動を思い出しても，腕を打ったようなこともなく，あまりに不思議なので祈禱師に占ってもらうと，「金神さまの祟り」と判断された．金神は，この村落のある地方では最も「祟りやすく，怒りっぽい」といわれている神であり，土や方角と関係があると信じられていた．この男性は手の障害が起こる直前に，炭焼きがまを作るために畑の土を掘り起こし移動させていた．その時期，その方角には金神さまがいるのに，何の許可もなく土を動かしたために祟られたというのが祈禱師の言葉であった．指示されたとおりに，土をもとの場所へ戻し，そこに御幣を立てて塩を撒いて清めをすると，嘘のように腕の痛みと腫れが消えたという．

祈禱師自らが行う治療儀礼や，指示されて自ら行う上記の事例のような治療儀礼で，急速に症状が軽減されたという経験は本人やその家族から何度も何度も繰り返し語られる．狭い，閉ざされた社会でのこのような現象は，直接それを体験しない人々にも共有される．病気の原因が何かの祟りとか何かの霊が憑いたと祈禱師から言われた場合，それを半ば疑いつつも半ば信じて治療儀礼を行うのが，この村落のほとんどの人々の病気をめぐる行動であった．以上のよ

うな社会で，精神的葛藤の「身体化」を証明することは容易ではないと考える．

「身体化」という概念は，人間の存在を「精神」と「身体」とに分けて，それを対立的にとらえようとする基本的な考え方があって，それを反映したものではなかろうか．人間の存在を「精神」と「身体」とに二分せず，二元対立としてとらえようとはしない人々においては，精神的葛藤そのもののとらえ方が異なり，それを「苦しみ」としてとらえるとらえ方が異なるという可能性もある．「身体化」という概念は魅力的だが，それぞれの文化ではより複雑で多様なメカニズムに従っていると考えて綿密な調査分析が必要だと考える．

注）

1） この論文は，L．ロマヌッチ＝ロス他編，『医療の人類学』（海鳴社，1989）に所収されている．

2） たとえば，A. Kleinman, 1977, Depression, Somatization and the New Cross-cultural Psychiatry, Social Science and Medicine Vol. 11.

なお，非西欧社会の人々の精神的葛藤についての記述は，フォスターとアンダーソン，『医療人類学』（リブロポート，1987）の第1章を参照してください．